

## 留学で変化したキャリア観

—私の考えるグローバル人材に近づくために—

# My Career View Changed by Studying Abroad: To Be a Globally Minded Person

九州大学経済学部卒 上妻 諒子  
KOZUMA Ryoko  
(Kyushu University graduate)

キーワード：海外留学、キャリア、グローバル人材

### 自己紹介

昨年9月に大学を卒業し、この春より社会人となりました、上妻諒子と申します。在学中は、韓国やアメリカ、フィリピン等への短期留学を繰り返し、4年次には香港大学へ10ヵ月間の交換留学をしました。現在は、出張や駐在が必須の日系企業に勤めています。今回は、大学に入学するまで全く海外に興味がなかった私が、なぜ留学を繰り返し、海外で働きたいと思うに至ったのか、大学時代のエピソードをご紹介します。その変化をお伝えしようと思います。

### 「何となく面白そう」から始まった、海外との出会い

高校まで全く海外に興味のなかった私が、海外に興味を持つきっかけとなったのが、九州大学主催の日韓海峡圏カレッジ(2014年度からは、その発展版の「アジア太平洋カレッジ」が実施されている)というプログラムでした。入学直後、何か新しいことにチャレンジしたいと思っていた時、たまたま目に入ったのがこのプログラムのポスターでした。文化交流や韓国語講座で釜山に行けるうえに、参加費は無料という文言に惹かれ、思わず応募しました。プログラムでは夏と冬に一週間ずつ韓国を訪れ、冬には北朝鮮問題に関するプレゼンテーション&ディスカッションを英語で行うという経験もしました。

プログラムを通して韓国の大学生とも非常に親しくなり、思い出深い充実した日々でしたが、この時一番感じたのは、「悔しさと危機感」でした。韓国側の学生の、アグレッシブに学び発言する姿勢や知識量に圧倒され、当時の私は議論に全く加わることができず、文字通り、完全に打ちのめされてしまいました。議論に参加すらできなかったことが悔しく、そして何より将来への危機感をおぼえまし

た。「将来この人たちとビジネスをすることになれば、絶対対等に渡りあえない」。この時の苦い思い出が、大学生活の目標を「国際的に活躍できる人材になる」としたきっかけでした。

そしてこの時、自分の目標を共有・明確化する契機となったのが、九州大学の山川賞<sup>1</sup>（毎年数名の学生に学業・課外活動に対する奨励金が支給される）でした。山川賞には選考がありますが、選考では大学卒業後、自分がどのように社会に貢献していきたいかを厳しく問われました。私は、日韓海峡圏カレッジの経験を踏まえ、「まず自分がグローバル人材としての素養・ネットワークを身に付け、そして最終的に日本の若者にグローバルマインドを持ってもらうきっかけ作りをしていきたい」という（当時の）自分の目指す姿を述べ、幸運にも援助を頂くことができました。山川賞で得た奨励金もあって、金銭的な不安もなくなり、その後何度も留学に挑戦することができました。



日韓海峡圏カレッジのメンバーと。プログラム最終日。（中段中央が筆者）今でも交流は続いている。

### アメリカ、フィリピン、そして香港へ

先述した日韓海峡圏カレッジの後、「国際的な人材、グローバル人材」になることを大学生活の目標とし、「とにかく海外へ行けば何か変わる」との思いで、アメリカに1ヵ月、フィリピンに3週間等々、短期留学を繰り返しました。また、日頃から海外とつながる生活を送るべく、留学生のチューターなどをしていました。海外と繋がりのある生活を1~2年続けているうちに、英語も上達し、様々な文化の違いに触れ、自分の見える世界も広がっていきました。しかしながら、自分の思い描く「海外で活躍する人材」には何か足りない、そんな気がしていました。その答えを見つけるべく、香港への1年間の交換留学を決意しました。

<sup>1</sup> 「日韓海峡圏カレッジ」 ([http://rcks.kyushu-u.ac.jp/kai\\_kyo/?q=node/111](http://rcks.kyushu-u.ac.jp/kai_kyo/?q=node/111)).



歴史ある香港大学 Main Building。



香港の街並み。高層マンションが立ち並ぶ。

### 香港での生活 — 「長旅感覚」から「日常」へ

そして4年生の後期、香港での新生活をスタートさせました。最初は、知らない世界に飛び込むワクワク感というよりも、本当にやっていけるのか、不安の方が大きかったのを覚えています。道も言葉も（香港は広東語）人も全てがわからない、にも関わらず相談できる知り合いもほとんどいない、心細い日々でした。その土地に住むという感覚を味わう余裕などなく、「長旅」のような感覚で楽しもうと思うのが精一杯でした。

しかしこの不安があったからかもしれません。この時、「一人で悩んでいても何も変わらない、行動あるのみ」という覚悟を決めました。とにかく出会った人には話しかけ、わからないことは必死に聞き、人が集まるイベントには全て参加する、まさに「自ら世界を切り拓く」という言葉がぴったりな、人生初の経験ができました。そうしているうちに、知り合いも増え、仲の良い友人もでき、気が付けば気を張らずに生活できるようになっていたと思います。大学からの帰り道、ぼーっと歩いている時間が「香港での生活が日常になった、私の帰る家は今はここにあるのだ」とふと感じる瞬間でした。



香港大学名物、ハイテーブルディナー後の様子。  
（中央下段が筆者。その他は香港出身の友人）



香港大学テニス部に入部。（左から4番目が筆者）練習や試合に参加した。

## 「留まって学ぶ」意義 — 留学開始直後の“雨傘革命（香港反政府デモ）”

留学とは字の通り、「留まって学ぶ」ことを指します。短期滞在では得られなかったであろう経験ができるのが、長期留学の良いところです。私の場合、留学開始直後に”雨傘革命”が起きました。強引な香港統治を推し進める中国政府に対する香港人の危機感と不満が爆発したのが、雨傘革命でした。デモは学生を中心に行われ、大学の友人もデモに参加していました。学内は民主化を訴えるポスターで埋め尽くされ、講義も一時休講になったり、授業内でデモに関するディスカッションを行ったりと、一時期はデモ一色でした。

正直なところ、留学前は香港の位置さえ知りませんでしたし、香港と中国の違いもイメージできませんでした。しかし実際に香港に住んで地元の人と関わっていくうちに、香港は長い間中国本土から分離され、経済も文化もオリジナルに醸成されてきたこと、香港人の中には「中国統治よりも英国統治時代の方が良かった」と言う人が少なくないこと、香港の人は中国人と呼ばれるのに抵抗感を感じていることなど、中国と香港の間のすき間を感じる場面に何度も遭遇しました。もしあの時日本にいたら、テレビの中のデモは、遠い所の話だったかもしれません。しかし、実際にその場にいたことで、その国の抱える問題や人々の思いを肌で感じ、自分のこととして捉えることができました。



香港の中心地に座り込んでデモをする若者たち。(筆者友人撮影)

街中・学内のいたるところにこのような言葉が書かれていた。(筆者友人撮影)

## 香港で変化したキャリアパスへの考え方

香港を留学先として選んで良かったことの一つは、現地で働く多くの日本人の方にお会いして多様なキャリアのあり方に触れられたことです。それまで「海外で働く＝駐在」という方程式しか頭になかった私ですが、香港で弁護士になった方、香港の税理士事務所に就職した方、香港で起業した方、香港メディアで有名人になった方などなど、多種多様なキャリアを積み重ねている方々に出会ったことで「仕事」への見方を大きく広げることができました。

香港で出会った方々はまさに私の目指す「海外で活躍する人材」でしたが、それぞれのキャリアパスや人生観は全く異なっていました。グローバルに活躍するための素養は各人それぞれ異なり、正解

などないことに気が付きました。ただ、もし一つ共通点を挙げるとするならば、「とにかくチャレンジングであること」かもしれません。言葉や文化の壁などをものともせず、自らの行動で道を切り拓いている姿は、かっこよく、大変良い刺激をもらいました。多くの出会いのおかげで、「海外で働く＝駐在」「卒業したら日本企業で就職」という自分の中の当たり前を一度捨て、もっと広く、自由に将来を考えてみるようになったと思います。

## 10カ月の留学を終えて ー留学で得たもの

10カ月の留学は、本当にあっという間でした。日々新しいものに触れ、何かしら自分の中で挑戦しようという心構えを保ち続けた10カ月間は、自分史上最高に充実した日々でした。こんなに新鮮な毎日は、日本での大学生活だけでは得られなかったと思います。

留学後は「留学で得たものは？」とよく聞かれましたが、私の答えはこうでした。それは「自信と度胸」です。勉強面や生活面で困ったことも多々ありましたが、10カ月間、失敗を恐れずとりあえずやってみる、自分から行動を起こす、この姿勢を徹底し、結果的に全く土地勘のない場所に馴染み、楽しく過ごすことができたという経験は、何よりも大きな自信になりました。留学を終える頃には、また新しい場所で生活してみたい、香港で出会った社会人のように海外でもどこでもイキイキと働きたい、という思いが強くなり、いつの間にか、海外で働くことが憧れから目標に変わっていました。

帰国後は、早く社会に出たい気持ちと、日本のことをもっと知りたいという気持ちが強かったため、海外での就職はいったん考えず、日系企業に就職しました。今勤めている会社は、全世界的にビジネスを展開しており、世界どこでも出張や駐在できる（しなければならない）ことに加え、若いころから海外と接点を持ちながら働くことが求められます。もし1年生の時に韓国に行っていなかったら、もし香港に行っていなかったら、この道を選ぶことはまずなかったでしょう。今進んでいる道は、1年生の時に思い描いていた道よりもワクワクする道だと、確信しています。今の私を見て、一番驚くのは1年生の頃の私かもしれません。

## 「グローバル人材」とは何か ー私の考える「グローバル人材」

自分の中でなかなかつかめなかった「国際的に活躍する人材、グローバル人材」の定義ですが、短期留学や香港での交換留学を経て、自分なりの答えが見えてきました。

今、私の中のグローバル人材は、①違いを楽しめる人、②自分を持っている人、だと考えています。①に関しては、好奇心旺盛とも言い換えることができるかもしれません。海外という場所は、言葉も文化も、歴史も社会構造も文化も、違いであふれています。その違いを毛嫌いするのではなく、「こういう違いも存在するのだ」という寛大な心で楽しめる人が、海外で楽しくたくましく生きていける人なのだと思います。

②に関しては、①と矛盾するように聞こえるかもしれませんが、これも重要な要素だと考えます。人間関係は、結局は「一対一」の関係です。だからこそ、皆「君はどう考えるのか、君は何者なのか」を問うてきます。海外では、周囲の人のバックグラウンドの多様さは日本と比べ物になりません。だからこそ、一人一人が存在感を出すことが必要になります。自分の存在を知ってもらう、自分を理解してもらうためにも、「自分はこういう人間なのだ」と伝える力が不可欠だと感じました。

グローバル人材の定義は、きっと人それぞれ違います。自分の中でも、今後また変化していくでしょう。自分自身まだまだグローバル人材には程遠いですが、これからも自分らしく道を歩みながら、目指すべき人材に近づければと思っています。

\* 本記事については、本マガジン『留学交流』2016年3月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

#### 【論考】

日韓を軸にした「アジア太平洋カレッジ」の開設

-学部1,2年生向け日韓米国際共同教育の基盤づくり-

九州大学韓国研究センター准教授 崔 慶原

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/09/201603choikyungwon.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2016/03/09/201603choikyungwon.pdf)